

陶芸教室を中心とした カルチャーセンター

1、レンガの煙突はカルチャーセンターのシンボルとして使います

まず、煙突の傍に陶芸用の窯を作ります。そして、この窯を利用して陶芸教室を運営します。今この様な窯を個人で作ることはできません、陶芸をしている方は、電気釜や、ガス等の窯で我慢しています。こうした中で薪を利用した本格的な窯は利用価値が高いのではないかと考えました。レンガの煙突はこの窯のシンボルとしておおいに役立つものと思います。とはいえ酷使することはできないと思いますので、陶芸教室の作品を作るために概ね一月に一回か二月に一回位のペースで使います、燃料は薪とし、県産材を利用している材木工場から、松や杉材の建築の破材を分けて貰います。この様な利用の仕方を基本として考えれば煙突が甦るのではないかと考えてみました。

2、二つの蔵は補強して一つの建物として利用します。

真中で壊れてしまった蔵は解体し、使える材料は東側と西側の蔵の修理に使います。真中の部分は鉄骨で頑丈に作り直し、東西の蔵の耐震対策を担います。東西の蔵は見たところ傾いていて今後も地震力等の横方向の力には耐えられるとは思いません、そこで蔵自体に筋違い等を入れて補強するのではなく、真中部分に丈夫な建物を鉄骨で作りに横方向の力を負担してもらいます、縦方向の力は現在の建物を補強すれば十分耐えうる建物になると思います。全体を一つの建物として利用し、内側には柱の位置で仕切りを入れ使い道に応じた部屋の広さを確保します、全体は平屋とし天井は作らず、吹抜けの様な感じで使いますが、温度調整や、換気のために何らかの方法を取りたいと思います、必要により二階建てにする場合は中庭の様なものを作り、基本的な明るさは、天窓を設け明るい天空光を利用するようにその光を左右の棟にも到達するように考えてみました。

3、建物の利用方法

建物は利用してこそ生きてきます。ただ見るだけでは生きてきません。また、現在のお酒の製造、販売に関してマイナスになつては意味ありません。建物を生かし、現在の商売を生かし、大間々の地の利を考えた場合、カルチャーセンターを行うのはどうでしょうか。内容はあくまでも陶芸教室が中心で、それに関係した、生け花教室、茶道教室、和食の料理教室、書道や着付けの教室も併用しても良いと思います。とにかく和の素晴らしさが、陶芸を通して理解出来る様な教室にできればきっと需要はあるのではないかと考えました。幸い、大間々地区及びその周辺は意外と和の文化を理解する人が多く、「新しく教える」という立場ではなく、「全体で楽しむ」「広く人生を楽しむ」という様な立場のカルチャーセンターであるならば、人は集まるのではないかと思います。

また、この様な利用の仕方であるならば、市の協力を得て公民館を併用するのも可能だと思います。御承知とは思いますが、大間々地区には公民館はなく、地区の集会場を公民館と称しています。そこでこの場所を公民館として利用できるように整備し、地元住民の活躍の場を提供することも可能ではないでしょうか。

そこで建物をその構造を利用して三つに分け、一番西側のスペースは発表の場とします。この展示場は通年して利用し、陶器を展示するのは勿論、この窯で作った陶器を利用した生け花やそれらを利用した書道展も行います、作品には定価を付け販売しても良いでしょう。一部には料理教室で作った物の試食会を行っても楽しいのではないのでしょうか。

真中のスペースは作業棟です、陶器のろくろを廻したり、粘土を練ったりしましょう、また生け花の下ごしらえや、料理教室の一部を造っても良いでしょう。ここは原則として土足で行動し作業をする場所としてはいかがでしょうか。

東側のスペースはお茶やお花、書道といった落ち着いた場所です、窓が少なくともその分壁が多く飾り物のスペースは十分とれます、明りは中央棟の天窓から入った光で和紙を通した様な和らいだ光が期待できます。

4、人が人として生き生き生きる為に

建物は利用する人が生き生きとして、人生を楽しめる様な使い方がベストだと思います。古い建物は長い間、風雪や雨、直射日光等から人とその財産、生活等を守ってくれました。この先人のエネルギーは膨大なもので私達はまだまだ学ばなければならない事が多くあります。古くなった建物は何となく懐かしく、母に抱かれている様な錯覚を受ける時もあります。新しいものに憧れる気持ちと古いものを懐かしむ気持ち。そんなものが一体として表現出来れば計画は必ず成功するのではないかと思います、出来るだけ古い建物を利用出来る様な再建築を提案致します。